

2016. 12. 13 (火)

鳥に学ぶ光と闇の大切さ

奥野卓司

光なしには動物も植物もありえない

アドベントの時期にお招きいただき、ありがとうございます。打樋先生にご紹介いただいたように、私は社会学部ではメディアについての講義をしていますけれども、学生時代には動物学を勉強していました。関西学院大学でも教職員による動物愛護の会をしており、打樋先生にも入っていただいています。

今、創世記の冒頭の箇所を読んでいただいたように、光は全ての世界にとって大事なものです。つまり、動物も植物も光なしには生きられません。動物は植物がなければ生きられません、その植物は太陽の光を受けて行う光合成という作用によりエネルギーを得て、成長していることは皆さんもご存じのとおりです。

したがって、全ての生き物は、光をベースにして生活しており、このために生物の体の中の時計は、光が自分に当たること、つまり太陽が昇ることを、エネルギーにするだけではなく、生活の基準にしています。

だから、現在の暦の多くはグレゴリオ暦で、太陽を中心にした暦になっていますけれども、暦は後にできたもので、創世記に書かれているとおり、生物の生活はもともと光によってコントロールされ、その光をエネルギ

ーにして成り立っています。

闇の重要性

ところが、実は生き物は光だけではだめで、意外なことに闇がないと、生きられません。たとえば「断夜効果」というものがあります。秋になって咲く花は、長くなっていた光の当たる時間が短くなってくると、体の中の時計が感じて花を咲かせます。また、春に咲く花は陽が長くなってある時間を超えると花を咲かせます。しかし、それらも、その間に夜を挟まないと、その時計のスイッチが入りません。つまり闇も大事なんです。

クリスマスになりますと、町にはたくさんイルミネーションがとまりますが、なかでもルミナリエは阪神大震災の鎮魂の象徴です。昨日で終わりましたが、あの光がついたときに、皆さんも感動しますよね。でも、ルミナリエだけでなく、今では至る所でイルミネーションがされています。

おとといまで東京に行ったのですが、東京ではどこを歩いてもイルミネーションばかりでした。このようになってしまうと、夜でもずっとお昼のような感じがして、これでもいいのかなと思ってしまいます。テーマパークへ行くと、USJも含めて光がいつも照って

いますし、今は普通の遊園地でもイルミネーションをしています。きれいですけれども、本当にこれだけでよいのでしょうか。

そうすると、そこには逆に闇の価値、暗い所の価値もかえて出てきます。暗い所の価値は気づかないと分かりません。それに気づいたのは、例えば、この近くだと岡山県に美星町という小さな町があります。美しい星の町と書きますが、江戸時代に付けられた名前です。ここに住んでいる人々はもとは外灯もあまりついていなくて、過疎で寂しくなってくるし、自分の町は暗くて嫌だとずっと思っていました。

しかし、阪神間の辺りでは夜も明るすぎで、星が見えません。美星町まで行くと真っ暗闇なので、星がきれいに見えますから、ここに世界の天文ファンが目を付けました。天文ファンが都市からやってくることで、美星町の人たちがこれは町おこしになると初めて気づきました。

今はクラウドファンディングがありますから、ネット上でこのようなことをやりたいと呼びかけるとそれに共鳴する方々がお金を出してくれるので、お金を集めて天文台を作り、美星町は今では天文マニアの聖地になっています。

真っ暗闇は具合が悪いのですが、真っ暗闇の中に星空がある、光があることを感じた人が、これを文化的な価値にすることができました。光は闇の中になければ輝きません。

渡り鳥の不思議

私は定年退職が間近ですけれども、だんだんイヌやネコの動物愛護の研究にかかっており、バードウォッチングもしています。もう

一つは、兼任で千葉県我孫子市にある山階鳥類研究所の仕事をしています。山階鳥類研究所はアジア最大の鳥類の研究所ですけれども、この頃は、鳥インフルエンザの防御とかコウノトリの保護、ヤンバルクイナの発見などの話題でいろいろなところに出していただいています。先週は、われわれの研究所のアルプスの分室からライチョウが逃げたことでニュースにされてしまいましたが、天然記念物も扱っています。

それから、よく載せていただいているのはアホウドリです。アホウというぐらいなので賢くないようで明治時代に人間に乱獲されてしまい、昔は日本の至る所にいましたけれども、今は伊豆半島の鳥島などのごく限られた島にしかすんでいません。この鳥島は地震で沈む恐れがあり、私達は彼らを小笠原諸島の智島（むこじま）へ移動させています。

日本にどのぐらいの種類の鳥がいるのか調べるのは難しいことで、鳥は地球全体で大体9,900種類か、1万種類類とも言われています。日本の鳥はおよそ五百種類くらいだと思ってください。でも、日本の鳥といっても、鳥には国境がありません。鳥の多くは渡り鳥ですが、留鳥だけが常に同じところにいる鳥で、漂鳥といって陽の長さによって日本の中でも北から南に旅をするものもいます。ですので、いったいどれが日本の鳥かは、あまりはっきりしたことは言えませんが、とりあえず一年間のうち日本列島に一時的に鳥が五百種類くらいでしょう。

その中のひとつがアホウドリです。アホウドリも渡り鳥で、鳥島から太平洋を渡って、北アメリカへとずっと旅をして、そして、また帰ってきます。将来、鳥島に地震が起こったり、火山が爆発したりすると、全滅してし

まうので、よその所に巣を作ってあげようと、われわれはよかれと思ってわざわざ人工的に彼らを新しい島へ移します。

渡り鳥はなかなかたいしたもので、元の記憶があるので新しい島からアメリカに出発しても、またもといた島に戻ってしまいます。これが10年間ぐらいかかり、ようやくこの春、新たな賀島(むこじま)で生まれたひなが、生まれた所に帰りました。ですから、さかんにニュースにいただいています。

研究所の人たちは鳥を研究しているので、鳥は頭がいいと言います。私はもともと動物学で昆虫を研究していましたが、昆虫学者は鳥は頭が悪いと言います。なぜかということ、たとえばチョウはひらひら飛びますけれども、鳥は真っすぐにしか飛ばないので、ひらひら飛ばれてしまうと、チョウを捕まえることができないからです。

逆に言うと、チョウにしてみたら、ひらひら飛ぶだけで鳥をごまかすことができます。チョウから見ると、鳥はアホなやつだという話になります。ところが、鳥は夜も嵐もある長期間、長い距離を飛んできて元の所に戻ることができるので、渡り鳥は大変頭がいいと、鳥の学者は思っています。

鳥は光の反射がよく見えますが、逆に言うと、光がない所では鳥目で夜は見えません。つまり、人間の普通の視覚の範囲しか見えませんので、鳥類は昼間は活動できますけれども、夜はぶつうは動けません。

チョウとガでは、夜に飛ぶのがガであり、昼に飛ぶのがチョウですが、ともに同じ鱗翅目という仲間です。しかし、夜に飛ぶガは、決して昼間に飛ぶチョウのようにひらひら飛ばなくても、鳥にやられる心配がありません。

ん。なぜなら、鳥の目が見えないからです。

ところが、その鳥が渡り鳥として北アメリカからずっと回って、同じ鳥島に帰ってくるのはどのようにしているのでしょうか。その間、太平洋の真ん中で夜は飛ばずにどこかで休むわけにはいきませんから、渡り鳥は夜も飛んでいます。

では、どのようにしているのかというと、逆に光しか見えないことにより、夜の闇の中で星座だけが見えるのです。星座によって自分の位置を判断して、自分の体の中にあるホルモンによるGPSにそれをあわせて方向を定めて飛んできます。

ですから、昼間は海面や島を見ながら飛行していますし、夜になると空の星座を見ながら飛行しています。したがって、渡り鳥は、夜も明るいままだと飛べません。つまり、暗い中に光がある、星が見えることにより、自分が飛んで生きていく道を見つけることができるのです。

人生を鳥に学べば

人間の人生には明るいことばかりではなく、何となくしんどいことやねじれたことがどうしても起こり、闇のときもあります。でも、そのときに、闇のなかで星のように光ったものが逆に輝いて見えるので、それを見つけてその方向に生きていくことも必要ではないかということ、私は鳥から学ぶことができました。やはり鳥は賢いのかもかもしれません。どうもありがとうございました。

(社会学部教授)